

Title	アメリカ史における西部：フロンティア、ボーダーランドおよび西部研究の動向
Sub Title	The west in American history : frontiers, borderlands, and the future of western history
Author	柳生, 智子(Yagyu, Tomoko)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2015
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.108, No.2 (2015. 7) ,p.427(157)- 454(184)
JaLC DOI	10.14991/001.20150701-0157
Abstract	<p>アメリカ史における西部研究は、20世紀中は、ほぼターナーのフロンティア理論をもとに発展した。それは、西部のフロンティアの存在がアメリカ化、個人主義、民主主義といったアメリカ例外主義的要素を生み出し、アメリカの発展を支えたという主張である。1980年代以降この理論は批判を浴び、その後の多文化主義やグローバル・ヒストリーなどの影響を受けて西部研究は細分化し、フロンティア理論のような理論的支柱のないまま、現在に至っている。</p> <p>History of the American West developed along the disciplines that were laid out in Frederick Jackson Turner's frontier thesis throughout most of the 20th century. Since the 1980s, the major elements of the thesis that promoted American exceptionalism, such as the rise of individualism, seeds of democracy, and rapid "Americanization" on the frontier, came under severe criticism from the "New Western Historians" that focused more on ethnic diversity, class structure and gender issues. While western history today has sprawled into smaller subfields without a grand thesis that would replace the Turnerian view, several new promising directions in research have emerged to keep the field relevant in American history.</p>
Notes	故岡田泰男名誉教授追悼特集：経済学部における歴史研究：日本、アジア、そしてアメリカ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20150701-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アメリカ史における西部

——フロンティア、ボーダーランドおよび西部研究の動向——

柳生智子*

The West in American History:

Frontiers, Borderlands, and the Future of Western History

Tomoko Yagyu*

Abstract: History of the American West developed along the disciplines that were laid out in Frederick Jackson Turner's frontier thesis throughout most of the 20th century. Since the 1980s, the major elements of the thesis that promoted American exceptionalism, such as the rise of individualism, seeds of democracy, and rapid "Americanization" on the frontier, came under severe criticism from the "New Western Historians" that focused more on ethnic diversity, class structure and gender issues. While western history today has sprawled into smaller subfields without a grand thesis that would replace the Turnerian view, several new promising directions in research have emerged to keep the field relevant in American history.

序説

アメリカ史のマスター・ナラティブとも言える、アメリカ発展の通説的な理解はリージョナルな一国史観を中心に作り上げられてきた。ルイス・ハーツのリベラル・コンセンサスの流れを汲んだ自国の例外主義・孤立主義の称賛、自国の栄光の歴史を鼓舞する風潮は、戦後の冷戦対立の激化と拡大する中産階級に浸透した行動・思想の定着・固定化を受けて支持されたが、1960年代の黒人やマ

* 慶應義塾大学経済学部
Faculty of Economics, Keio University

イノリティの公民権運動、ベトナム戦争の泥沼時代に研究者を志し、既存の体制やそれまでの伝統への反抗勢力としての経験を持つ世代がアカデミズムの中心を担うようになると、こうした歴史体系は批判に晒され、新しい世代による歴史研究の潮流が生まれ始めた。一方、1930年代のチャールズ・ビアードによる、農民対商業主義的資本主義の対立を繰り返すことがアメリカ人の国民的気質に寄与したという説は、ハーツとは対照的に、様々な経済的対立や階級闘争を想起する議論として学界では長く一定の支持が続いた。ハーツもビアードもその理論やアメリカ史の解釈について支持、批判の流れが存在したが、いずれも学界内の閉ざされた空間でのことであり、一般国民への影響は限定的であった。アメリカ人の国民的気質の形成、アメリカの特殊性と例外主義について一般国民にとって最も説得力のある解説を提供したのはフレデリック・ジャクソン・ターナーのフロンティア理論であった。それはアメリカの発展が、フロンティアが東部から西部へ進む過程ですべて説明できると主張した理論である。その大胆かつ明快で包括的な理論は国民がアメリカの西部地域に抱くイメージと重なり、国民の愛国心やプライドも満足させる称賛と栄光に満ちた歴史解釈であった⁽¹⁾。ターナーのフロンティア理論は高度に政治的・経済的要素を含んだ学際的な理論でありながら、そこに描かれたフロンティアを逞しく前進していく開拓者の幾重もの波は、国民の意識の中に刷り込まれ、世界最大の工業国家へと邁進する国家の発展する姿と容易に照らし合わすことができた。フロンティア理論の神髄は簡潔な形となってアメリカの一般国民に浸透し、国民の西部に対する憧憬の中に固定化されたのである⁽²⁾。

アメリカ史における西部史研究は20世紀末に大きな転換期を迎え、その後、研究の方向性を巡り現在までその変革は続いている。それはアメリカ西部史の多様な要素を分析するための様々なアプローチによる試みがこの間急速に増えたと同時に、アメリカで西部地域を対象とする研究者が世代交代の時期にあることも西部研究の方向性を複雑化した。この数十年のアメリカ史全体の支配的な潮流であったマルチカルチュラルイズムやグローバルな叙述の影響を受け、西部史も植民地期から現在までのナラティブの再構築、⁽³⁾「次の西部史」の段階への移行を迫られている。

(1) Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America: An Interpretation of American Political Thought since the Revolution* (New York: Harcourt Brace and Co., 1955); Charles Beard and Mary Beard, *The Rise of American Civilization* (London: J. Cape, 1927).

(2) ターナーのフロンティア理論は1893年のアメリカ歴史学会での報告で発表された。論文については Frederick Jackson Turner, "Significance of the Frontier in American History," *Annual Report of the American Historical Association of the Year 1893* (Washington D.C., 1894), 197-228. 以下にも収められている。Frederick Jackson Turner, *The Frontier in American History* (New York: Holt and Company, 1920), 1-38. ターナーは生涯、それほど多くの著作を残したわけではない。著作は *Rise of the New West, 1819-1829* (New York: Harper and Brothers, 1906) および *The United States, 1830-1850: The Nation and Its Sections* (New York: Henry Holt and Co., 1935) の2冊であり、上記 *The Frontier in American History* および *The Significance of Sections in American History* (New York: Henry Holt and Co., 1932) に主要な論文はまとめられている。

フロンティア理論はアメリカ例外主義とアメリカの発展のすべてを説明する一大理論であったため、発表後1世紀近くも西部史はこの理論を中心に発展することになった。今日ではその主張・解釈や枠組みについて多くの修正が施され、その一部は現在でも議論の対象になることもあるが、その理論や根拠を全面的に受け入れた西部史研究は皆無と言ってもよい。ターナーの理論をそのまま鵜呑みにして西部史研究を行うことは現在の研究動向では不可能である。少なくとも、ターナーの主たる議論である、アメリカの発展が西部開拓の歴史によってすべて説明されるという極端な主張に同調する歴史家はいないであろう。

西部史は植民地としての歴史、征服・暴力の歴史、都市空間や広大な草原地帯プレーリー・プレーンの混在、急進的な労働運動と保守的な政治、文化的多様性、人種間ヒエラルキーなどの特徴が集中する地域であるがゆえ、研究者間の議論が活発化しやすい要素はあった。従来、一次資料分析への忠誠心の高い領域としての西部史研究の伝統は一つの流れとして現在も生き続けている。元来西部史は社会史・経済的分析の対象に適した地域であり、センサスを利用し、人口成長率や流動率、都市の成長などの分析に加え、土地制度、農民運動や組合関係の資料なども豊富に扱うミクロ的地域研究が発達した。西部史を地域（リージョン）の研究として捉えるのか、あるいは歴史的過程（プロセス）として分析するのかについてターナー以来議論が絶えなかったが、最近の研究者はそのような分類を超えて、ジェンダーやポストコロニアル理論など新しいアプローチの適用に躊躇がない。歴史だけでなく多様な理論を用いた学際的なアプローチと並行して、西部をアメリカ国内の一地域としての枠を超え、トランスナショナルな枠組みで分析しようとする動きが目覚ましい。西部はあらゆる国家、集団、個人が最終到着地として辿り着いた地である、という視点からその歴史を捉えなおし、新たな意義を見出そうとしている。

この数十年の傾向は、マスター・ナラティブを崩壊させ、アメリカ史の書き換えが迫られる事態になっている。アメリカ西部史を19世紀末までの歴史に押し込めてしまったフロンティア理論からの解放によって、20世紀から現代までの西部史研究が大幅に増えただけでなく、そのテーマや切り口も多種多様になった。さらには西部を世界史的な視点で分析することで他の大陸に見られたフロンティア社会との比較や太平洋圏との関係など、新たな視角も登場している。ターナーが19世紀末に深く植えつけた西部史研究の根幹を揺るがす一連の活気ある「新しい西部史」研究者たちが学

-
- (3) マルチカルチュラルリズム研究の一例として Ronald T. Takaki, *A Different Mirror: A History of Multicultural America* (Boston, MA: Little, Brown and Co., 1993). アメリカ史のグローバル化について Thomas Bender ed., *Rethinking American History in a Global Age* (Berkeley: University of California Press, 2002); Thomas Bender, *A Nation among Nations: America's Place in World History* (New York: Hill and Wang, 2006); Ian Tyrrell, "American Exceptionalism in an Age of International History," *American Historical Review*, 96 (October, 1991), 1031-1055; 中野耕太郎「『アメリカ史』叙述のグローバル化」『パブリック・ヒストリー』6号(2009年), 16-29頁。

界に登場してからすでに25年以上が経ち、西部史そのものが環境史、ボーダーランド史、ポストコロニアリズムや先住民史に細分化する傾向があり、その進展を嘆く歴史家も多い。⁽⁴⁾ 昨今の動向では「西部」、「フロンティア」さらに第2節で見る「ボーダーランド」も Wests, frontiers, borderlands と複数形で述べられ、もはや単一のものとしては見られなくなった。西部史を活性化させる新たな包括的理論の登場が待たれる中で、西部史が現在もアメリカ史の中で意義のある領域であることを示すべく、様々な議論と試みが続いているのが現状である。

第1節 ターナーと「19世紀」の西部

アメリカ史ではここ数年間、南北戦争150周年を記念して戦時中や戦争前後に関する研究が学界で特集を組まれるだけでなく、歴史協会や博物館、大学などの企画として一般市民向けのイベントや講座・講演があらゆる所で開催されている。近年を振り返ると、アメリカ西部地域に関連する歴史上の出来事を記した行事が続いた。ルイスとクラークのアメリカ内陸の探検から200周年(2004~6年)、コロンブスのアメリカ「発見」から500周年(1992年)、米墨戦争やカリフォルニアのゴールド・ラッシュから150周年(1996~1998年、1999年)などがその例である。こうした数ある歴史上の出来事の記念行事の中でも、一般市民の抱くアメリカ国家像の柱として特に注目を浴びたのが1993年に発表から100周年を迎えたターナーのフロンティア理論に関連した諸行事であった。学界ではターナーの功績と西部研究の今後の行方について多くの学術誌の特集、シンポジウム、研究会で議論され、アメリカ史における西部の位置づけや西部の歴史の多様な側面への関心が高まることとなった。

フロンティア理論100周年の20世紀末頃、アメリカ西部史研究は大きな転換期の最中にあった。フロンティア理論は先に見たようにハーツやピアード、他にもホフスタッターやウッドワードらアメリカ史の大家らによる包括的な解釈の中でも、最も多く分析されてきた理論と言われる。それだけこの理論にはアメリカの特性と発展を繙くあらゆる要素が含蓄され、政教分離の民主主義が浸透したアメリカ例外主義の礎とされた。フロンティア理論が一般国民に支持された理由は、いくつか考えられる。当時のアメリカ人は世界をリードする国としての役割に目覚め始めるが、フロンティア理論はそれに十分訴える歴史解釈であった。また、アメリカ史におけるフロンティア開拓の歴史はイギリスなどのヨーロッパ列強に見劣りしない、英雄の活躍や神話的要素も組み込まれた鮮やかな歴史像を描いた。この発表後、何度か批判に晒されることはあっても、西部史の揺るぎない支柱とされたフロンティア理論は1980年代に起きたリヴィジョニストの大波によって根底から覆されてしまう。まさに100周年に向けての祝賀ムードに水を差す動きであったと言える。⁽⁵⁾

(4) 「新しい西部史」に関しては註13参照。

フロンティア理論は1893年の発表後、歴史家によって拡大解釈、明瞭化、修正、批判など一連の循環を経て、時とともにその理論への信仰は変容していった。1930年代にはチャールズ・ビアードがフロンティア理論はそればかりを強調しすぎて奴隷制や南部のプランテーション・システム、産業化、経営者と労働者の対立などの経済的諸要素を軽視していると批判した。フロンティアにおける「自由な土地」に対する疑問も生まれ、土地投機業者による買い占めや土地開墾費用の高さから開拓者への高利貸が横行した実態なども明らかになった。実際にフロンティアに移住した開拓者のデータからは、東部の労働者はあまりいなかったことが判明し、フロンティア理論の一つの柱である安全弁説も揺らいた⁽⁶⁾。1940年代にはジョージ・ピアソンが、ターナーが開拓者の生活やフロンティアで構築された制度・施設などについて、開拓者が以前生活していた社会からの連続性が多く見受けられることを無視し、フロンティアを後ろ向きに捉える要素を見ようとしなかったと分析した。その一方で、ターナーの一番の継承者と言えるピリングトンが1949年に出版した西部の通史はターナーの主張を骨子としたが、学会で好意的に受け入れられその後20年以上、西部史の標準テキストとして使われた⁽⁷⁾。

また、ターナーと異なる西部史の潮流も同時期に生まれている。一つは次節で述べる1920年代に登場したハーバート・ボルトンによるボーダーランド研究で、この研究の特徴はフロンティアにおける文化的多様性を追求し、アメリカ西部だけでなく西半球全体での異文化交流の比較やアメリカ南西部一帯のフロンティアとそこにおけるヨーロッパ列強との関係を強調した。もう一方の潮流は1930年代に登場したウォルター・ウェップによる環境史の視点で、西部の広大な自然の恩恵につい

-
- (5) Richard Hofstadter, *The American Political Tradition and the Men Who Made It* (New York: Vintage, 1954); Richard Hofstadter, *The Age of Reform: From Bryan to F.D.R.* (New York: Knopf, 1955); C. Vann Woodward, *The Burden of Southern History* (New York: Vintage, 1960); C. Vann Woodward, *Strange Career of Jim Crow* (New York: Oxford University Press, 1957). フロンティア理論についてまとめたものは John Mack Faragher, *Rereading Frederick Jackson Turner: "The Significance of the Frontier in American History" and Other Essays* (New York: Henry Holt & Co., 1994)。フロンティア理論を巡る様々な批判については Kerwin Lee Klein, *Frontiers of Historical Imagination: Narrating the European Conquest of Native America, 1890–1990* (Berkeley: University of California Press, 1997)。
- (6) Charles A. Beard, "The Frontier in American History," *New Republic*, 25 (February, 16, 1921), 349–350. フロンティア理論では東部で社会状況が固定化する傾向にあり、労働者が圧迫されたり、政治的束縛が見られるようなときもフロンティアが提供する自由な土地に向かって脱出できるという「安全弁説」を述べ、アメリカで社会的対立や労働運動が盛んにならなかった根拠に挙げられた。Lacy K. Ford Jr., "Frontier Democracy: The Turner Thesis Revisited," *Journal of the Early Republic*, 13, No. 2 (Summer, 1993), 144–163.
- (7) George W. Pierson, "American Historians and the Frontier Hypothesis in 1941," parts 1 and 2, *Wisconsin Magazine of History* 26 (September, 1942), 36–60; Ray Allen Billington, *Westward Expansion: A History of the American Frontier* (New York: Macmillan, 1st ed., 1949).

て歴史的に分析する必要性を説いた。彼らはいずれもターナー批判が目的ではなく、フロンティアに関する別の解釈や、アメリカ西部の新しい切り口を提案したにすぎないが、アメリカ例外主義の理論的根拠はフロンティアの存在だけではないことも主張した。⁽⁸⁾

ターナーの描いた鉱山労働者、カウボーイ、白人女性らが荒野を西進する神話的な西部像は世間では広く浸透したものの、学会ではその影は徐々に薄くなっていった。20世紀後半にはかつてのようにアメリカ史のすべてを説明しうる理論としての役割は終焉していたが、フロンティア理論に代わる新たな理論が登場するわけでもなく、ターナー理論が亡霊のように西部史を封じ込めてしまったことからアメリカ史の中でも西部史は軽視され、研究も下火傾向になり、一時的に停滞に陥ってしまった。

そうした経緯を辿っていったとはいえ、ある時期まで西部史研究はすなわちフロンティアを研究対象とすることであった。幾重もの波となったフロンティアの定着と移住者の定住の流れは、ターナーによればヨーロッパ人をアメリカ人にし、フロンティアへの移住者・開拓者は新たな経済的機會を得ることができ、アメリカ独自の实际的、個人主義的な国民性を身につけ、民主主義的な社会を実現させた。フロンティアの存在はヨーロッパと新世界の違いをほぼすべて説明しえた。フロンティアの独特の環境であった自由な土地と機会の提供、先住民との衝突の危険性などのあらゆる要素が、実用主義、開拓者・企業家精神などアメリカ人氣質を育て、アメリカという国家の諸制度の形成にも影響を与えた。ヨーロッパの移民はフロンティアで同化、すなわちアメリカ化し、それはアメリカを国民国家として統合し、民主主義を促進する効果も持っていた。⁽⁹⁾

ターナー自身、ウィスコンシンのフロンティアタウンに生まれ育ったという背景から、彼のフロンティア像は中西部地域の農民の移住の姿が原風景としてあった。そのためフロンティア理論は都市の形成や商人の影響力についてはほとんど触れられていない。ジョンズ・ホプキンス大学で学び始めたころはハーバート・バクスター・アダムスが教鞭を執り、アダムスのヨーロッパの権力や施設・諸制度がアメリカに移植されたという胚芽理論 (germ theory) にまだ魅了されていたが、徐々にターナーの主張は変化していった。⁽¹⁰⁾ フロンティア理論は、当時の歴史家の多くが奴隷制や憲法解釈に関連する研究ばかり進めており、胚芽理論への固執も強かったため、歴史家たちに関心の所在を変えるよう促す目的もあった。この理論には、ヨーロッパ中心史観から離れ、アメリカ国内を移動していくフロンティアの存在に目を向けるべきであるというメッセージが込められていた。論文

(8) ボルトンの代表作であり、ボーダーランド研究の先駆けとなったのは Herbert E. Bolton, *The Spanish Borderlands: A Chronicle of Old Florida and the Southwest* (New Haven, CT: Yale University Press, 1921)。西部の環境史については Walter Preston Webb が出発点と言われ、水資源とその管理の重要性を早くから説いた。Walter Preston Webb, *The Great Plains: A Study in Institution and Environment* (Boston: Ginn, 1931)。

(9) ターナーのフロンティア理論のアウトラインは岡田泰男「『フロンティア理論』100周年——ターナー学説の批判と評価」『三田学会雑誌』87巻3号(1994年10月)、381-397頁。

の中の一文で要約すれば、「自由な土地の存在、その継続的な後退とアメリカの西部への定住の進行は、アメリカの発展を説明しうる」のであり、この点によってアメリカはヨーロッパと区別された。アメリカの発展はヨーロッパの礎に頼ったものではなく、のちにメルティング・ポットと呼ばれた同化していく国民性、民主主義の萌芽、独立した個人主義と経済的・物理的流動性などアメリカの要素がフロンティアにあった。とりわけフロンティアの主要な役割は民主主義の推進であり、それは自由な土地から生まれ、政治権力と経済的機会が他のどの西洋世界よりも平等に進むと結論づけている。このプロセスは19世紀初めから1830年代にかけて、ジェファソンの夢とされた農本主義から、モンローの国家的共和主義、さらにジャクソン期のジャクソニアン・デモクラシーへの移行していくプロセスと重なっていた。すべてを説明しうるとされた万能のフロンティア理論であったが、ターナーがフロンティアと西部をほぼ同義に扱ったため、1890年の国勢調査によるフロンティアの消滅は同時に西部の歴史をも終焉させてしまった。ターナーにとっては、フロンティアの終焉はアメリカ史の一つのステージの終焉でもあり、アメリカは今後閉鎖された国内での政治や経済に取り組みなければならなくなった。19世紀末で閉鎖したアメリカ史は、結果的に学界における西部史研究も19世紀で完結させてしまい、その後の西部の発展についての分析は希薄になってしまった。⁽¹¹⁾

ターナー批判の一端は、1940年代にピアソンが指摘したように、フロンティアに移住した者がすべて過去を断ち切って新たなスタートを切り、他の移住者と同化してアメリカ化していったと解釈した点にあった。その後の研究では、フロンティアの開拓者と元の出身である東部との結びつきは重要視され、切り離して考えるべきではないと批判され、開拓者はフロンティアで新しい生活を目指した者ばかりではなく、東部海岸沿いでの過去の生活の再現を目的とした移住者も多かったことが分かった。1960年代になると、アメリカ例外主義と自国称賛の歴史に歯止めをかける社会変革運動がアメリカ全土を襲った。公民権運動の高揚とマイノリティの権利獲得の戦いが隆盛した社会情勢を受けてターナーに欠けていたマイノリティの視点を強調する研究が大量に登場した。ターナーはフロンティア以前に何百もいた先住民部族の存在や、黒人を初めとするマイノリティ、また女性の視点にも触れていなかったことで再度批判的にされてしまった。1970年代には環境問題への意識の高まりから、西部史では環境や資源の問題が研究の最前線となっていった。全国レベルでの人口の南部・西部への移動が見られたこともあり、1980年代までには極西部地域の研究も急増した。

(10) 胚芽理論を用いた代表作として Herbert Baxter Adams, *The Germanic Origin of New England Towns* (Baltimore: N.Murray, 1882)。ターナーの学者としての生涯については以下参照。Ray Allen Billington, *Frederick Jackson Turner: Historian, Scholar, Teacher* (New York: Oxford University Press, 1973); Allan G. Bogue, *Frederick Jackson Turner: Strange Roads Going Down* (Norman: University of Oklahoma Press, 1998)。

(11) Martin Ridge, “The Life of an Idea: The Significance of Frederick Jackson Turner’s Frontier Thesis,” in Richard W. Etulain ed., *Does the Frontier Experience Make America Exceptional?* (Boston: Bedford/St.Martin’s, 1999), 79.

ターナーに代わる新しい西部史の柱は 1980 年代から 90 年代に登場した。「新しい西部史」と呼ばれた一連の研究は、その中心的担い手となったパトリシア・リメリック、リチャード・ホワイト、ドナルド・ウースターらにより、一次資料の詳細な分析による西部の一般市民の生活ぶりを描き出すことを特徴とした。彼らは 19 世紀以外の世紀の西部を取り上げ、特に連続性の強調、あらゆる交換・交流への注視、ターナーの影から抜け出すこと、の 3 点を目指した。それによってターナーのフロンティアによる栄光のアメリカ発展史を覆し、ターナーにしがみついた「古い西部史」家から一線を画すようになった。新しい西部史家たちは、西部が植民地主義の温床であり、ヨーロッパ人による資源略奪や生態系の破壊、先住民らの文化の剝奪・征服過程の闇に部分を前面に打ち出した。かつての西部史が白人男性の視点から描かれたものであることや、アメリカによる征服以前の西部があたかも「処女地」であるかのごとく、居住していた先住民の視点を全く欠いた歴史であることを批判し、実際の西部は様々な人種、マイノリティ、階級の男女がいた空間であったことを描き出した。20 世紀以降の西部の都市化や環境問題などの重要課題を議論する隙を与えなかった「古い西部史」は時代遅れの感は否めなかった。ターナーがフロンティアにおける個人主義の成長を評価したのとは対照的に、新しい西部史家は西部を作り上げたのは連邦政府による領土の征服から統合へのプロセスであったとし、西部開発は連邦政府が果たした役割が大きかったことを主張した。西部で準州が州に昇格しても、初期段階では連邦政府の手助けなしには政治的、経済的に機能しなかった。連邦政府の介入とそれへの反発が西部の発展を 20 世紀以降まで特徴づけた。新しい西部史家は西部の人種的多様性や 20 世紀以降の歴史を正確に把握するため、他の研究者にもすでに古びたアン

グロアメリカ中心史観のターナーの理論を捨て去ることを要求した。⁽¹²⁾

リメリックの『征服の遺産』*The Legacy of Conquest* は新しい西部史の代表作であった。この中でリメリックはターナーの称賛される発展の連続に代わって、悲観的な征服過程を提唱した。土地の略奪に焦点を当て、侵略者であるアメリカやヨーロッパ列強は資本主義的発展になじみのない先住民らの土地を近代的手法によって略奪するが、略奪したその土地をうまく利用できなかった。『征服の遺産』から数年後には同じく新しい西部史家の代表格であったリチャード・ホワイトが *It's Your Misfortune and None of My Own* を出版した。ここでもターナーは否定され、環

(12) 新しい西部史家による代表作をいくつか挙げる。Patricia N. Limerick, *The Legacy of Conquest: The Unbroken Past of the American West* (New York: W.W. Norton & Co., 1987); Donald Worster, *Rivers of Empire: Water, Aridity and the Growth of the American West* (New York: Pantheon, 1985); Gerald D. Nash and Richard Etulain eds., *The Twentieth Century West: Historical Interpretations* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1989); Patricia N. Limerick, Clyde A. Milner II and Charles E. Rankin eds., *Trails: Toward a New Western History* (Lawrence: University Press of Kansas, 1991); Richard White, “*It's Your Misfortune and None of My Own*”: *A New History of the American West* (Norman: University of Oklahoma Press, 1991) など。

境は破壊され、社会構造は崩壊し、政治経済システムは民主主義を生むことはなく、新しい西部は生存への苦難の連続と連邦政府への従属に特徴づけられていたことを示した。ホワイトはさらに著書 *The Middle Ground* で「ミドル・グラウンド」の概念を用いて18世紀に五大湖周辺に勢力を拡大した先住民部族のアルゴンキアン語族と同地域に進出していたフランスとの政治的同盟とそれに伴う生活、文化、慣習などの融合について分析し、その後の世代の異文化交流研究、ボーダーランド研究に大きな影響を与えた。このミドル・グラウンドの概念はその後、西部における先住民とヨーロッパ人との衝突、接触のあった地域を指す用語として頻繁に登場することになり、初期アメリカ史ではこの概念は先住民がヨーロッパ列強に対して対等に交渉し合った場所という理解が定着した。最近ではミドル・グラウンドを超えて、「ネイティブ・グラウンド」という概念も登場しており、ここではヨーロッパ人は先住民に服従する立場にあり、そういう場では仲介役として先住民女性の果たす役割が大きかったという研究もある。ジェンダー・ディプロマシーとも言うべき、女性が捕虜、奴隷、密使などの立場から仲介・交渉し、一時的に貿易関係や停戦協定などが結ばれたことはジェンダー史研究から分析した西部史・植民地史の成果である。同様のアプローチでアラン・テイラーは18世紀のニューヨークとカナダの一部を支配したイロコイの6部族連合とイギリス、アメリカの関係性の変化について研究し、近年ではスティーブン・アロンらによるミズーリの研究も同じ手法を用いている。⁽¹³⁾

リメリックはフロンティアという用語の使用自体も拒否しようと呼び掛けた。そもそもターナーのフロンティアの定義は曖昧で多様に解釈可能で、自国史の称賛という幻想をもたらし、西部史を男性中心で単一民族主義的な枠に固定化してしまう危険性があるため、リメリックらは西部史をフロンティアがない世界から再構築する必要性を説いた。フロンティアの定義への批判は、1930～40年代から見られ、フロンティアが時に場所を指したり、プロセスを指したり、状態を示したりしていたため混乱を招いた。1950年代になってターナー擁護者による理論の精緻・洗練化がなされ、より受け入れやすい形になった。ターナー自身もフロンティアは捉えがたい用語であることを自覚していたが、彼にとってフロンティアは自由な土地の末端に位置することに最大の意義があり、「野蛮と文明が会える場所」でもあった。他にも、「自由な土地のこちら側」「インディアンの土地と定住地の外側のマージン」「最も急速で効率的なアメリカ化が起きている場所」といった表現でも説明した。また、フロンティアは毛皮商人、家畜飼育者、農民、鉱山労働者など職種によって異なる波が

(13) Richard White, *The Middle Ground: Indians, Empires, and Republics in the Great Lakes Region, 1650–1815* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991); Juliana Barr, *Peace Came in the Form of a Woman: Indians and Spaniards in the Texas Borderlands* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2007); Alan Taylor, *The Divided Ground: Indians, Settlers, and the Northern Borderland of the American Revolution* (New York: Knopf, 2006); Stephen Aron, *American Confluence: The Missouri Frontier from Borderland to Border State* (Bloomington: Indiana University Press, 2006).

存在した。つまり、ターナーはフロンティアという用語に様々な意味を与えてしまい、フロンティアが複数の段階を持っていたことを認識していたものの、定住のパターンと発展の過程は同一化したことで後世の歴史家には混乱を与えた。リメリックにはフロンティアという用語は「ナショナルスティックで時に人種差別的」に映り、新しい西部史は、それまでのターナーのすでに19世紀末で終わってしまった定義の曖昧な西部への移住の過程としてではなく、多様な人種が居住する実際の場所として、19世紀末以降も発展し続けた地域として捉えなおすことを重要視した。西部は現在も人種、民族・部族、ジェンダーの複雑な絡み合いを持つ地域であり、ターナーのアメリカ例外主義、自国称賛の歴史とは対照的に、過去の人種差別、環境破壊や経済的搾取などをすべて含めて明らかにした歴史構築が目指された。最近20年ほどの西部史の展開を見ると、リメリックの主張は確実に西部史家の間に浸透したと言えよう。フロンティアの概念に一切触れずして西部を記述することさえ可能であることは、ホワイトの *It's Your Misfortune and None of My Own* で証明された。リメリックやホワイトは西部の一般市民、文化、自然と環境、人種と階級、ジェンダーなどの構成を分析し、一世代前の西部史家では想像もつかなかった多様な西部像を描き出した。

一方、こうした新しい西部史への批判も巻き起こった。新しい西部史は、地域の特性である水の確保の面から環境を取り入れた研究もあれば西部と連邦政府の従属関係について焦点を当てた研究、土地の所有権に関する視点や西部地域の世界における位置づけを強調する研究など、方向性が細分化し、総括的な理論が出現しないまま進展した。あらゆる要素を加味することは、逆にそれぞれの研究の対象や影響の範囲を狭めた。また、新しい西部史はターナーの輝かしいアメリカ発展のプロセスとは対照的に、失敗と混迷の闇の歴史を描き出した。その中でターナー理論の一切、フロンティアの概念も完全に排除する姿勢に疑念も生じた。ターナーのフロンティアの定義は曖昧で、「野蛮と文明とが衝突する地点」という捉え方は今日では過度に人種差別的で全否定されうるのであろう。かつてのターナー支持の歴史家たちも、彼の理論の帝国主義的な前提については否定しなかった。しかし、フロンティア理論は西部史を語る上で完全に消滅してしまうほど小さな貢献ではなかった。そうした見解に立つ研究者らはハインとファラガーの通史 *The American West: A New Interpretive History* に代表されるように、フロンティア理論の修正・再解釈を試みている⁽¹⁴⁾。新たに再解釈されたフロンティアでは異文化の浸透が見られた地域として新しい研究史の中で生き続けている。新しい西部史によって一連の批判を受けた西部史は、アメリカ史全体の傾向でもあったアングロアメリカ中心史観という歴史傾向を縮小化させることになった。その代替として重要視されるようになったのが北アメリカに進出したヨーロッパ各列強の植民地計画であり、各国が遭遇した先住民との接点・交流や、各国の政策とその変容が西部社会形成に与えた影響についてであった。こうした多国籍な

(14) Robert V. Hine and John Mack Faragher, *The American West: A New Interpretive History* (New Haven, CT: Yale University Press, 2000) は近年の西部の通史の中では最も多くのヨーロッパ列強のフロンティアについて言及している。

視点はターナーの議論には欠けていたものであった。新たに解釈されたフロンティアはターナーが描いた東から西への一様の流れではなく、より乱雑で入り乱れたものであった。新しい西部史はこうした雑多で混ざり合った社会形成過程を分析する中で、フロンティアよりもより現実に近いボーダーランドの概念が分析ツールとして適切とされ、ボーダーランドが西部史で急に脚光を浴びるようになっていった。

第2節 西部とボーダーランド

アメリカ史におけるボーダーランドの概念についての議論はハーバート・ボルトンが出発点となる。ボルトンはターナーの弟子であったが、1920年代にはカリフォルニア大学バークレー校で教鞭を執り、1921年に *Spanish Borderlands* を発表する⁽¹⁵⁾。前節で見たようにターナーのフロンティアの定義は曖昧であったが、地理的・文化的境界が明確でない場所で人々が出会うところ、という解釈を与えるならば、ボーダーランドは植民地・先住民らで争われる境界領域のことを指した。フロンティアが白人以外の人種に対して排他的で独立心の強い個人主義を特徴としたのに対し、ボルトンのボーダーランドは異人種に対して寛容でスペイン政府とカトリック教会によって作り上げられた。さらにターナーのフロンティアはヨーロッパの影響を切り離し、新しくアメリカ化する過程であったが、ボルトンのボーダーランドでは教会が先住民やアメリカ人を布教を通してヨーロッパ化しようとした⁽¹⁶⁾。

見方によっては、フロンティアとボーダーランドはお互い補完し合う関係でもある。ボーダーランド研究の場合、ヨーロッパ各国の植民地支配の理論的根拠や支配の在り方とその変化の理解が重要になるが、ヨーロッパ列強と接触した先住民が各国の植民地支配政策の差異をどのように利用し、先住民らの都合の良いように異文化との関係を築いていったかという点に着目している。ヨーロッパ列強の植民地征服に対する先住民の対応という複雑な経緯の分析は、東部から西部へフロンティアの波が続くとしたターナーの理論には欠けていた面であると言えよう。ターナーの理論の再解釈を目指した継承者たちは、かなりボルトンのボーダーランドの概念に接近することになる。ボルトンとそれに続いた研究者らはフロンティアの両側、例えばスペインと先住民、フランスとスペインなど、双方からの異文化の交流と社会形成への影響を分析することを主眼としていたのである。

ボルトンは早くからアメリカ史が全面的に東部海岸沿いのイギリス植民地の視点から書かれていることを問題視し、アメリカ史の真の理解にはスペインの果たした役割を理解する必要があると説いた。ターナーの東から西へ、という一面的なモデルでは北アメリカ大陸におけるヨーロッパ勢力拡

(15) Bolton, *The Spanish Borderlands*.

(16) Albert L. Hurtado, "Bolton and Turner: The Borderlands and American Exceptionalism," *Western Historical Quarterly*, Vol. 41, No. 1 (Spring, 2013), 12.

大の様々な方向性と影響を描き出せない。ターナーの描いたアングロアメリカのフロンティアが先住民の後退を余儀なくしたという見方に対し、ボルトンはスペインのボーダーランドではヨーロッパの植民地とその周辺の先住民や開拓移住者との間で新たな共同空間の構築が見られ、それを積極的に評価すべきであるという見解であった。アメリカ西部は征服された一直線のナラティブではなく、先住民と植民地や開拓者による異文化の接触や遭遇、それへの対応が繰り返される中で西部社会が形作られ、後世に影響を与えた。ボーダーランドでは、それぞれ時代や地域、当事者である国や部族によって異文化の混合の程度や社会的流動性、共同社会制度の構築の有無なども異なる。ボルトンが研究したスペイン植民地は、本国政府の絶対主義的支配の色合いが強く、そこではフロンティアで見られたような開拓者による自治や個人主義、民主主義などは生まれる余地はなかった。これはメキシコなど他のスペイン植民地でもほぼ一貫して共通の現象であった。⁽¹⁷⁾

ボルトンの提唱したボーダーランド研究は比較研究を刺激した。北アメリカにおけるスペイン植民地と、南米を中心に広範囲にわたって存在したスペイン植民地それぞれのボーダーランドが比較対象となった。初期の段階では、アメリカのフロンティアと南米アマゾン流域のフロンティアの比較なども見られ、当然ながらフロンティアの物理的な環境によってその地で生まれる文化にも差が出る⁽¹⁸⁾ことが強調された。比較研究が続く中で、フロンティアはターナーの言う「野蛮と文明の会う場所」という発想は拒否され、そこでは様々な先住民が存在し、違う部族や民族が会うことで文化や制度に影響を与えていたことが示された。アングロアメリカのフロンティアが先住民を後背地に押し出して封じ込め、排除・一掃することが有効な手段とされたのに対し、スペインのボーダーランドでは植民地のスペイン人と先住民とが同化していく傾向にあった。ターナーのフロンティアでは、白人の開拓者同士がフロンティアで出会い、同化してアメリカ化していくと説明したが、スペインのボーダーランドでは白人、先住民、黒人、その他移民すべての多様な民族が同化していったのであり、今日的にはより「アメリカ化」に近い現象が起きていた。⁽¹⁹⁾

ボルトンはパークレーなどで104人の博士を育てたが、ボーダーランド研究の問題点は、その見

(17) John Francis Bannon, *The Spanish Borderlands Frontier, 1513-1821* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1974). 最近のスペインのボーダーランド研究として以下を挙げる。David J. Weber, *The Spanish Frontier in North America* (New Haven, CT: Yale University Press, 1992); John J. Kessell, *Spain in the Southwest: A Narrative History of Colonial New Mexico, Arizona, Texas and California* (Norman: University of Oklahoma Press, 2002). メキシコ系の開拓者がテキサスのフロンティアにおいて自由な土地と機会を与えられ、多様な人種が混ざり合う場所で社会的上昇も実現できたという研究もある。Alicia Tjarks, "Comparative Demographic Analysis of Texas, 1777-1793," *Southwestern Historical Quarterly*, 77 (1974).

(18) David J. Weber, "Turner, the Boltonians, and the Borderlands," *The American Historical Review* Vol. 91, No. 1, (Feb., 1986), 71. ボーダーランドの比較研究について Michael Baud and Willem Van Schendel, "Toward a Comparative History of Borderlands," *Journal of World History* Vol. 8 (Fall, 1997), 211-242.

解を、すでに確立していたアメリカ史の通史の中に組み込むことができなかつた点にあった。彼らの研究は往々にして、侵略してきたヨーロッパ列強がボーダーランドに持ち込んだ制度、文化などの重要性、遭遇した先住民らの異文化それぞれの継承性を強調するがゆえに、ヨーロッパ列強の隆盛と衰退、勃興する新たな勢力、先住民側の依存性やヨーロッパ列強に対する戦略的な政策など、文明の衝突によって生じた多様な背景を見出せない傾向にあった。ターナーのフロンティアはそもそも西部を通りすぎる一過性のものであったため、その場での継続性を重視せず、この点は問題にならなかつた。結果的にボーダーランド分析のこうした限界は概念自体の評価を下げてしまい、ボーダーランド研究はアメリカ史の骨格を変えるほどのインパクトを与えることはなく、その後、西部史の周辺研究、西部史から派生した一領域にとどま⁽²⁰⁾ってしまった。

ボーダーランドはフロンティア同様、時代とともにその評価は変容したが、フロンティアのように大きく批判されることはなかつた。批判的になるほど重要な分野とされていない期間が長かつた、という見方が正確かもしれない。フロンティアとは対照的にボーダーランドは用語そのものを否定するような動きもなく、むしろその言葉が含蓄する様々な意味や対象を拡大する方向に進んでいった。1980年代になると新しい西部史の台頭、歴史研究における文化史や社会史的アプローチの隆盛、1990年代以降のコロンブスのアメリカ「発見」から500年の節目などを契機として、さらにアメリカ社会も20世紀後半以降、経済発展著しい南部サンベルト地帯への産業や人口の移動などもあって南国境付近、極西部の歴史への関心が高まり、ボーダーランド研究がアメリカ植民地研究の中で徐々に注目されるようになった。フロリダからカリフォルニアに至るアメリカの南国境は元スペインの植民地としてボーダーランドとしての歴史を持ち、ヒスパニック人口の急増という現実⁽²⁰⁾に即してスペイン植民地とアメリカの関係を分析する研究が急増した。このころのスペインのボーダーランド研究は、制度政策の分析よりも、日々の生活や家族などにも着目しながら、列強の狭間で移住者がどのように生きたかを描こうとし、フロンティアが到達する前の西部地域における活気ある複雑な生活模様を分析した。こうした潮流を受けて一周辺分野であつたボーダーランド研究は新しい息吹をもらい、神話的に一般国民に浸透していた先住民の征服とカウボーイの西部史に代わり、領土と権力を巡ってヨーロッパ列強、先住民、開拓者間で闘争や協調が繰り返され、文化的交換、同

(19) アフリカとの比較は Howard Lamar and Leonard Thompson, *The Frontier in History: North America and Southern Africa Compared* (New Haven, CT: Yale University Press, 1981)。ラテンアメリカは David J. Weber and Jane M. Rausch eds., *Where Cultures Meet: Frontiers in Latin American History* (Wilmington, DL: Scholarly Resources, 1994)。ゴールド・ラッシュを比較した研究として David Goodman, *Gold Seeking: Victoria and California in the 1850s* (Stanford, CA: Stanford University Press, 1994); Bradley J. Parker and Lars Rodseth eds., *Untaming the Frontier in Anthropology, Archaeology, and History* (Tucson: University of Arizona Press, 2005)。

(20) David J. Weber, "The Spanish Borderlands of North America: A Historiography," *OAH Magazine of History*, Vol. 14, No. 4 (Summer, 2000), 6.

一化、反乱や抵抗、人種、階級、ジェンダーやセクシュアリティなどあらゆる要素がボーダーランドで行き交っていたという複雑で多様な西部史の分析手法として多用された。アルバート・ハータドが言うように、「ボーダーランドは多文化主義的なアメリカ西部の分析の中心的概念」であった。スペインのボーダーランドはスペインが北アメリカから撤退した19世紀初めで終了するが、ボーダーランドの概念はそれ以降の時代から今日に至るまでのアメリカとメキシコ国境付近の人種や文化の多様性、その異文化の交流のダイナミズムについての研究にも適用されている。また、西部に限らず、南部・南西部の19世紀の綿花地帯の最先端領域や、20世紀の南部の研究にも適用されており、こうした現象は創始者のボルトンすら予想のつかなかった展開であろう⁽²¹⁾。

スペインのボーダーランドが一層注目される契機となった研究は1991年のグチエレスの *When Jesus Came, the Corn Mothers Went Away* であろう。ここではニューメキシコの植民地史をスペインと先住民との間の交渉を中心に広範囲のテーマから扱い、それまでのボーダーランド研究が制度史に特化する傾向であったのに対し、スペイン政府が一体となった教会・布教活動を通して、結婚制度を利用しながら植民地で社会秩序を強要したプロセスを解明した。さらにスペイン植民者らの中にいた搾取的なエリート層が貧しいヒスパニック層の移住者や先住民奴隷とは距離を置きながら労働を搾取し、女性が性奴隷として利用された事例なども叙述し社会史的な分析を試みた。この研究によってスペインのボーダーランドの見方が大きく変わっただけでなく、そこで用いられた権力、性、ジェンダーなどの分析視角はその後の西部研究、ラテンアメリカ研究にも少なからず影響を与えた⁽²²⁾。

ボーダーランド研究が注目されるようになり、かつてなら北アメリカのフロンティアという用語が使われていた概念も、最近ではボーダーランドという用語が使われ、先住民からの視点の研究も西部に限らず、南部や中西部でも急増した。ボーダーランドでは多様な民族の接触が見られたが、先住民とヨーロッパ植民者間の衝突と交流に関する研究が大半を占めていた。近年はボーダーランドにおける先住民と黒人コミュニティとの関係を追求める研究が新しい境地を開いている。スペイン領フロリダは大量の黒人人口を抱え、その半分以上は奴隷であったが、当植民地では奴隷は法的な手段を取る、あるいは地元の先住民であったセミノール族の領土に逃げ込めば自由になることが

(21) Albert L. Hurtado, "The Spanish Borderlands," *OAH Magazine of History*, 10 (Winter, 1996), 13–14. 南西部綿花と奴隷制プランテーションのフロンティアの研究には以下がある。David J. Libby, *Slavery and Frontier Mississippi, 1720–1835* (Jackson: University Press of Mississippi, 2004); Donald P. McNeilly, *The Old South Frontier: Cotton Plantations and the Formation of Arkansas Society, 1819–1861* (Fayetteville: University of Arkansas Press, 2000); Andrew J. Torget, *Seeds of Empire: Cotton, Slavery and the Transformation of the Texas Borderlands, 1800–1850* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2015).

(22) Ramon Gutierrez, *When Jesus Came, the Corn Mothers Went Away: Marriage, Sexuality, and Power in New Mexico, 1500–1846* (Stanford, CA: Stanford University Press, 1991).

約束されていた。この情報を聞きつけたサウス・カロライナの奴隷が集団で武装し、フロリダに南進して自由になるために、雇い主ら白人層を殺害する反乱が起きた。これが、その後の植民地黒人支配の強化へとつながった植民地期最大の奴隷反乱である1739年のストノ反乱である⁽²³⁾。スペインはこうした特殊な統治方法のもと、スペイン領やフランス領で生まれた混血のクリオール、カリブ海のイギリス領などから逃げてきた黒人奴隷など、様々な黒人が混在していた。自由となったフロリダの黒人は軍兵や熟練労働者として貢献した。1821年にフロリダがアメリカ領になると多くの自由黒人はスペインの撤退とともに植民地を去ったと言われる。自由黒人は、スペイン支配下では自由を享受できたが、アメリカの支配下ではその自由度はなくなることを理解していた。同じような傾向はスペイン領ルイジアナのケースでも見られ、自由黒人もそうではない黒人奴隷も、スペイン支配下の方が、1763年以前のフランス支配や1803年以降のアメリカ支配よりも自由を享受できたと言われている。スペイン領であったニューオーリンズの研究で知られるキンバリー・ハンガーは自由黒人の法的権利、雇用の機会と社会的地位について調べ、彼らが徐々に上昇の機会を得たことを分析し、同じくギルバート・ディンの研究も、ルイジアナの黒人奴隷についてスペイン法下ではある程度保護が約束され、自由身分獲得への道筋も準備されていたが、当時のスペイン統治の知事と地元の権力者であるプランター階級との関係によって、黒人の自由度とその締め付けは変動したという⁽²⁴⁾。どのボーダーランドでも黒人が存在し、ムラートと呼ばれた混血も多く存在したが、南東部では植民地の制度もカリブ海の奴隷制社会のそれと似たものとなり、一方南西部ではメキシコ系のメスチーソ人口が多いことから、スペイン支配層は黒人よりも先住民を搾取しようとする傾向があった。グチエレズ以降、南西部の社会史研究が見られるようになったが、そこでは先住民がスペインの支配下で搾取される一方、混血化して同化していく過程を詳細に分析している⁽²⁵⁾。

イギリス、スペイン、フランスなど北アメリカで領土を占領していたヨーロッパ列強はいずれも先住民部族と接触・交渉し、中には協調的な同盟を結んでお互いの権益を守りながら定住していった。植民地期以降も19世紀前半まではアメリカ、ヨーロッパ各国、および先住民との対立構造は北アメリカ大陸全土で見られたが、ヨーロッパとアメリカでの民主主義革命を機にボーダーランドの

(23) ストノ反乱については以下参照。Peter H. Wood, *Black Majority: Negroes in Colonial South Carolina from 1670 through the Stono Rebellion* (New York: Norton, 1974); Mark M. Smith ed., *Stono: Documenting and Interpreting a Southern Slave Revolt* (Columbia: University of South Carolina Press, 2005); Peter Charles Hoffer, *Cry Liberty: The Great Stono River Slave Rebellion of 1739* (Oxford: Oxford University Press, 2010)。フロリダの黒人社会についてはJane Landers, *Black Society in Spanish Florida* (Urbana: University of Illinois Press, 1996)。

(24) Kimberly S. Hanger, *Bounded Lives, Bounded Places: Free Black Society in Colonial New Orleans, 1769–1803* (Durham: Duke University Press, 1997); Gilbert C. Din, *Spaniards, Planters and Slaves: The Spanish Regulation of Slavery in Louisiana, 1763–1803* (College Station: Texas A & M University Press, 1999)。

(25) Weber, “Spanish Borderlands,” 7–9。

柔軟だが脆弱な均衡体制が浸食し始め、先住民は徐々に征服される側に圧していった。多くの先住民がいたミズーリが準州から州に昇格する際に締結されたミズーリ協定では、奴隷制採用州になるのか、自由州として連邦に加入するのか、さらにはその先の西部の奴隷制採用地区と自由州の境まで規定したが、ミズーリや西部の先住民の領土に対しての取り決めはなかった。この傾向はさらに強化され、19世紀末にかけて、帝国間の争いが徐々に国際協調の姿勢へと変容していく中で、ボーダーランドは徐々に各種条約によって定められたボーダーのある土地、つまり国境へと変わっていった。国際的に条約によって定められた国境を守るという相互理解が浸透し、列強の争いは領土の獲得が確定すると、その後は貿易権の拡大へと関心がシフトした。国家がそれぞれ領土内の土地の支配を確立させると、ミドル・グラウンドの居住者として先住民が他集団と交渉する余地のあったボーダーランドの時代は終焉した。競い合う国家を互いに牽制して有利に物事を進めようとする戦略はもはや通じなくなり、列強の「間」に位置して領土を支配することができなくなってしまった。国境が固定化されると、国境内の所有権や市民権、人口の移動などもすべて国家の権限のもとに統括されていった。ボーダーランドが徐々にボーダーとなっていく中で、それまで流動的で異文化交流が活発に行われたフロンティアは固定化し、排他的な秩序を生むこととなった。⁽²⁶⁾

もはやフロンティアを「野蛮と文明の衝突地点」とする見解は認められないが、二つ以上の文化の交流地点としての分析はボーダーランド研究の発展によって現在の西部史研究の主要な流れの一つとして継続している。侵略する側と侵略される側の文化の衝突と、その地域の物理的な環境によってもたらされるダイナミックな空間はその時と場所によって独自のものとなった。アメリカ西部研究もボーダーランド研究も、フロンティア理論とは離れたところで新しい研究の方向性を見出そうと進んでいると言える。

第3節 西部研究へのアプローチ

かつてボルトンはアメリカ歴史学会の会長就任の挨拶で、より偉大でより大きなアメリカの叙事詩、「大アメリカ」の概念を提唱した。⁽²⁷⁾これは、ボーダーランド研究を進めていく上で彼が到達した使命であった。アメリカの西部の理解には一国史だけではなく、ボーダーランドにおける諸外国と先住民との接触が不可欠であるし、さらには、アメリカと外部、とりわけ西半球全体をひと括りに捉えて歴史像を描き出す必要性を訴えた。ボルトンの提唱は当時のアメリカ西部史家にはあまり響

(26) Jeremy Alderman and Stephen Aron, "From Borderlands to Borders: Empires, Nation-States, and the Peoples in Between in North American History," *American Historical Review*, 104 (June, 1999), 814-841.

(27) Herbert E. Bolton, "The Epic of Greater America," *American Historical Review*, Vol. 38, No. 3 (1933), 448-474.

かなかったが、ラテンアメリカ研究者には大きな刺激を与えた。

ボルトンの師であったターナーも、アメリカ史と世界の比較を軽視したわけではなかった。実際ターナーは「ある土地を取り上げてその研究をその領域に限定することはできない。なぜなら地域史は世界の歴史に照らし合わせてしか、正確に理解できないからである」と述べている⁽²⁸⁾。ターナーはアメリカ史研究者に、アメリカ史の「最もアメリカ的な部分」が見られるフロンティアに着目するように促したが、フロンティア以前のアメリカは対象となっていなかった。今日の西部史家はフロンティア以前の北アメリカが多国籍な要素が強かったこと、西部がアメリカの一部になってからも、国境や海を越えて入ってくる移民や貿易品で国際的な西部が形成されていったことを認識している。グローバルな西部研究への先陣を切ったのが再注目されたボーダーランド研究史家たちである。彼らはもともとスペイン植民地の比較史を中心として道を切り開いたが、現在では時代や地域を超えての比較研究が盛んである。西部を研究対象としている研究者の中には、西部史への貢献の自覚のない者も多い。西部の都市と環境問題や、植民地期の異文化交渉とジェンダーの要素を研究する者は、他国や他地域との比較も並行して行い、西部史家という認識もない。一方、西部在住の特定の先住民部族史も広く西部史に含まれるとするならば、今日の西部の範囲はかなり拡大することになる。

ターナー批判で「新しい西部史」を構築し画期的な転換をもたらしたりメリックやホワイトの世代も今や一つ前の世代となり、次の西部史の地平を探る段階に入っている。アメリカ史全体のグローバル化の波は、アメリカ例外主義のリベラル史観から抜け出し、トランスナショナルな歴史枠組みを目指すべきと主張している。フロンティア理論 100 周年はとうに過ぎ、ボルトンのボーダーランド 100 周年が近づく中、今後の西部史の行く末についていくつか考える潮流を概観する。

(1) 人種の多様性、西部「神話」とパブリック・ヒストリー

西部研究の今後の方向性について、現在の西部史研究の流れから推察できる一つの潮流は西部の人種の多様性に焦点を当てた研究である。最近の新しい研究者は「西部」への関心が研究の原点ではなく、一般市民の生活の中でのジェンダー、人種、階級などの要素が研究の出発点になっている。西部史はもともと、著名人の歴史を得意としていた分野であった。ポピュラー・カルチャー研究に多大な影響を与えたビリー・ザ・キッド、バッファロー・ビル、ワイアット・アープなどの西部劇に欠かせないキャラクターや、軍人ジョージ・アームストロング・カスターなどについても多くの著作や自伝がある⁽²⁹⁾。こうした個人史は、西部の神話性を際立たせる重要な要素となったことは言うまでもない。しかし、最近のジェンダー、人種、階級などに着目する研究は「新しい西部史」の流れを汲み、一般市民が中心である。しかも、1990 年代に広まった文化史や文化人類学的なアプローチ

(28) Frederick Jackson Turner, "The Significance of History," *Wisconsin Journal of Education*, 21 (October-November, 1891), 22.

の適用にも積極的である。彼らは「新しい西部史」が発見した様々な見解や視点をもとに、西部に生きた一般の人々の仕事や生活の在り方を、文書館の資料を徹底的に調べ、学際的な分析を多用して明らかにしようとしている。先に述べた画期的な研究となったグチエレズの *When Jesus Came, the Corn Mothers Went Away* や、エリオット・ウェストの *The Contested Plains* などは文化地理的な分析を取り入れた学際的西部研究の最たる例である。⁽³⁰⁾ 様々な背景を持つ集団の分析、という側面では 20 世紀の西海岸における草の根運動から出発した新保守の台頭を描き出したリサ・マッガーの *Suburban Warriors* なども西部史と捉えることは可能であるし、カリフォルニアの金鉱発掘者やコロラドの炭鉱労働者を分析したスーザン・リー・ジョンソン、トマス・アンドリューズの研究も、西部の多様性を描いていると言える。労働争議や暴力行為が相次いだ 1910 年代の対立は、西部が国民経済に組み込まれていく過程とその抵抗を示し、人種間の対立と産業資本家の西部への影響力の浸透が西部の対立構造を一層複雑化したことが彼らの研究によって明らかになった。⁽³¹⁾

アメリカ西部全域が単一の民族によって支配されたことは歴史上なく、多数の先住民部族、ヨーロッパ系移民、黒人、メキシコ移民に加え 19 世紀半ば以降はアジアからも移民が多数流入することになる。次世代の西部史家は、多民族・多人種社会である西部の共同社会成立までの異文化交流の視点を持たずして正確な西部像を描くことはできないであろう。西部は人々の交流と文化の混在が特徴の一つであるが、あらゆる人種が交わっていく地域、という特徴の一方で、19 世紀後半以降、西部には人種排他的な動きも一つの流れとしてあった。⁽³²⁾ 1850 年代にはカリフォルニアが外国からの鉱山労働者に対して課税し移民排斥の政策を打ち出した。中国人労働者に対してはさらに厳しい対応で、1882 年に中国人排斥法が制定され、中国人労働者は定着した地域の他の労働者との関係で人種問題を複雑化することになった。⁽³³⁾ 西部のアジア系人口の研究はマイノリティの中で最も研究が進

(29) Mark J. Dworkin, *American Mythmaker: Walter Noble Burns and the Legends of Billy the Kid, Wyatt Earp, Joaquín Murrieta* (Norman: University of Oklahoma Press, 2015); George Armstrong Custer, *An Autobiography of George Armstrong Custer, newly edited and introduced by Stephen Brennan* (New York: Skyhorse Pub., 2012) など。

(30) Gutierrez, *When Jesus Came*; Elliott West, *The Contested Plains: Indians, Goldseekers, and the Rush to Colorado* (Lawrence: University of Kansas Press, 1998).

(31) Lisa McGirr, *Suburban Warriors: The Origins of the New American Right* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2001), Susan Lee Johnson, *Roaring Camp: A Social History of the California Gold Rush* (New York: Norton, 2000); Thomas Andrews, *Killing for Coal: America's Deadliest Labor War* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2008).

(32) 西部の人口構成の歴史については、Walter Nugent, *Into the West: The Story of Its People* (New York: Knopf, 1999)。

(33) メイ・ナイは coolie という用語の示す意味の地域別（西部と南部）の歴史の変遷についての分析を通して、アメリカ西部の中国系移民を失敗に終わった移民政策という視点ではなく、地域の人種と労働の境界を複雑化した要因として、移民と人種、労働の関係性を再考することを提唱した。Mae M. Ngai, "Western History and the Pacific World," *Western Historical Quarterly*, Vol. 43, No. 3 (Autumn, 2012), 282–288.

み、早くから国際的な枠組みの採用に積極的であった。他のマイノリティ研究も昨今は進展が著しい。20世紀後半以降はメキシコ革命以降に急増したメキシコからの移住者、ラテンアメリカ系の移民が排斥のターゲットとなっており、彼らの急増は西部の人口構成を大きく変化させた。チカノ史は労働史との連携が重要で、その領域を追求した研究はアジア系と同様、国際比較やトライカルチュラル——アメリカ人、メキシコ系アメリカ人、メキシコ人——の関係性に焦点を当ててきた。⁽³⁴⁾1965年の移民法改正以降はメキシコ系だけでなく長らく制限されていたアジア系の移民も大量に西部に押し寄せるようになり、人種構成は一層複雑化した。西部の黒人人口は20世紀半ば以降増え続け、西部の黒人研究は都市部の黒人コミュニティの研究や西部での公民権運動の展開が最も豊富である。都市に定着した人々の人種間対立は激しく、その帰結は1965年、1992年のロサンジェルスでの暴動で明白となった。こうした衝突もまた西部の多元文化社会の特徴となっているが、人種間の比較研究はあまり多くはなかった。最近になり先住民と黒人の関係を追求したブルックスの *Confounding the Color Line* やマイルズの *Ties that Bind*、アジア系と黒人の関係についてはスコット・クラシゲの *The Shifting Grounds of Race*、黒人とヒスパニックの関係はバウマンによる *Race and the War on Poverty* などが登場し、フォーリーによる *The White Scourage* はテキサス中部の綿花生産地において白人、黒人、チカノ間の階級とジェンダーがどのように重なり合い社会形成に影響したかを分析した意欲作であった。⁽³⁵⁾

西部の神話性と史実の正確な把握も、パブリック・ヒストリーの充実を目指す潮流を受けて西部史に欠かせない方向性であろう。歴史家たちは西部を学術的に描き出すことに従事し、一般市民の持つ西部のイメージとの接近をあえて試みてこなかった。ターナーが1893年にシカゴでフロンティア理論を発表した同じ時期に大好評であったバッファロー・ビルによるワイルドウェスト西部劇場がシカゴで催されていたが、ターナーは西部劇に見られるようなフロンティアの神話的な解釈を極端に嫌悪した。それまでに様々な郷土史のカラー・ライターズやダイム小説によって西部の先住民

(34) チカノ史と労働史の研究の一例として以下がある。Zaragoza Vargas, *Labor Rights are Civil Rights: Mexican American Workers in Twentieth-Century America* (Princeton: Princeton University Press, 2005). 西部のアジア系もひと括りにすることは不可能で、従来研究が進んでいた日系や中国系移民に加え、ベトナム、カンボジア、タイ、フィリピン、韓国出身のアジア系移民が今日急増している。さらに黒人も、アフリカから直接到着する移民も増え、黒人というだけでアメリカ南部の奴隷にルーツを求めることはできなくなっている。

(35) James F. Brooks, ed., *Confounding the Color Line: The Indian-Black Experience in North America* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2002); Tiya Miles, *Ties that Bind: The Story of An Afro-Cherokee Family in Slavery and Freedom* (Berkeley: University of California Press, 2005); Scott Kurashige, *The Shifting Grounds of Race: Black and Japanese Americans in the Making of Multiethnic Los Angeles* (Princeton: Princeton University Press, 2008); Robert Bauman, *Race and the War on Poverty: From Watts to East L.A.* (Norman: University of Oklahoma Press, 2008); Neil Foley, *The White Scourge: Mexicans, Blacks and Poor Whites in Texas Cotton Culture* (Berkeley: University of California Press, 1997).

との衝突やヒーロー物語、フロンティアの無法地帯で活躍するガンブラー、デスペラード、売春婦、カウボーイや探検家などの話が一般大衆に浸透しており、史実よりかなり着色されていた。ターナーは、西部はロマンチズムによってではなくより学問的に分析する対象として捉えるべきだと主張した⁽³⁶⁾。しかし今後は西部に関する絵画、ダイム小説、ワイルドウェスト劇、広告宣伝資料や映像・テレビの中の西部像を、実際の西部の発展と結びつけて解説する研究も増えるであろう。西部はアメリカの他の地域よりもイメージされた部分が一般に向けて強い影響力を持っており、学界の外ではそうした書物やメディアは依然として人気が高い。近年の西部史家はそうした一般のイメージに接近しようと西部史に貢献し、活躍した人物を研究対象に取り入れることも行ってきた。かつての「古い西部史」ではフロンティアの存在が西部史を19世紀に封じ込めて終結させる恐れから、近年は意識的に時間的・空間的閉鎖性を打ち破って西部の歴史を一般に広める努力も行ってきた。近年の西部史は、過去に封じ込まれた誰も居住していない西部ではなく、現在にまで拡大して定住者が長く定着する地域としての分析を目指しており、パブリック・ヒストリーに一層接近して研究が進められていく可能性が高い⁽³⁷⁾。

(2) 西部枠組みの拡大化、グローバル化

西部研究の今後を検討する上で、「西部」という枠組みの問題が生じる。「西部」という地域がどこを指すのかはターナー以来、議論されてきた。独立戦争終了時にはアメリカの西部の境界はミシシッピ川であったが、1812年戦争後によりややくイギリスは五大湖の南側一体の領土を支配し、ミシシッピ川以西も徐々に領土化していった。19世紀半ばにはアメリカ人が西海岸に到達するが、ターナーが「実にアメリカ的な」と述べた西部は、先に見たように実際はアメリカが到達する前は非常に国際的な地域であった。ターナーが1893年のフロンティア理論の中で示した「西部」は主にアラチャ山脈とミシシッピ川の間領土のことを指していた。Far Westは、ミシシッピから西海岸までであった。西部の中での地域区分についてはターナーも曖昧で、ひと括りにGreat Westと議論することもあった。ターナーにとっては西部地域をどう区切るかや、西部地域に関心があったというよりは、西部への進展、西漸の動きに関心があったと言える。

昨今の研究が進むにつれ、西部の境界はますます複雑になってきている。先住民とヨーロッパ列

(36) Richard W. Etulain, "The Frontier and American Exceptionalism," in Etulain ed., *Does the Frontier Experience Make American Exceptional?*, 8–9.

(37) 例えばバッファロー・ビルの自伝的とその存在が作り上げた神話と文化について説得力ある歴史的解釈を施した Louis Warren の著作や、Martha Sandweiss のアメリカ西部と写真がどのように並行して発展していったかを分析した研究は神話と実話のつながりをそのまま鵜呑みするだけでなく、調査した点に評価が高まっている。Louis Warren, *Buffalo Bill's America: William Cody and the Wild West Show* (New York: Knopf, 2005); Martha Sandweiss, *Print a Legend: Photography and the American West* (New Haven, CT: Yale University Press, 2002).

強との接触が境界となるならば、その枠は一層拡大される。「新しい西部史」家の間でも、西部地域がどこを指すのかは合意に至らなかった。リメリックの所属するコロラド大学アメリカ西部研究センターで発刊された地図では、西部の西の境界は太平洋岸の少し内陸側、東の境界はロッキー山脈麓であった。この領域だと生態系はある程度統一が取れるが、一般に広く認識されているアメリカ西部はむしろ、アメリカの西半分全部である。しかし生態系や自然世界の境界を無視しては政治的に作られた境界、あるいは学術的に作られた境界になってしまう。こうした議論の末、西部はその境界が曖昧で、西部は一つではなく、たくさんの西部がある、という結論にたどりつく。最近のメイ・ナイやムンホ・ジュン、東栄一郎らの西部の議論は太平洋圏からアメリカを分析しており、アメリカ西部が太平洋から見ると「東の先端」になるという視点に立つと、フロンティアや西部開拓の議論はこれまでとは全く異なる方向性を見せる画期的なものになる。西部の境界の在り方や、流動性が高くかつ多様な西部の人口構成は「アメリカ史のグローバル化」の流れの中で、西部がアメリカの一地域でなく、より広範囲において中心的な役割を果たしていたことを明白にするであろう。⁽³⁸⁾

西部史と世界の結びつきは20世紀になってより一層強くなった。西部で産出される資源は世界市場と切り離せなくなり、人口構成はより遠くからの人々の移住で複雑化していった。ホームステッド法は1862年の制定であるが、所得者のピークは20世紀になってからであり、いかに多くの人が西部に向かったかを示している。ターナー自身も世界史とのバランスの重要性を説き、新しい西部史家の代表格のリメリックも、西部と世界との結びつき、西部史はその発展を「世界史の一部として」捉えてこそ意義があることを強調した。この点においてはボルトンの偉大なるアメリカ叙事詩「大アメリカ」の訴えは現在広く受け入れられていると言えよう。

(3) アメリカ植民地史の修正

昨今のもう一つの潮流として、西部をアメリカ史の中心に据えようとする動きがある。ボルトンが批判したように、アメリカ史、特に植民地史はアメリカ東海岸から始まったものとされ、その後の発展も時代区分もアングロアメリカの視点から描かれており、これまでそれが通史、マスター・ナラティブとして認識されてきた。この視点に立つと、独立13州より西の領域はアメリカ合衆国によって領土化されるのを待つだけの地域になってしまう。それでも最近まで学界も一般教育も、この通史を採用してきた。20世紀末になってアトランティック・ヒストリーが注目され、アメリカ史のグローバル化に拍車をかけたかに見えたが、大西洋の視点からはアメリカ西部は遠く、その議論に重要な位置づけを与えられなかった。⁽³⁹⁾大陸の西側は定住者のいない自由な土地であるというター

(38) Ngai, "Western History," ; Moon-Ho Jung, *The Rising Tide of Color: Race, State Violence and Radical Movements Across the Pacific* (Seattle: University of Washington Press, 2014); Eiichiro Azuma, *Between Two Empires: Race, History and Transnationalism in Japanese America* (New York: Oxford University Press, 2005).

ナーの見方は、新しい西部史に刺激された先住民研究・異文化交流分析の活発化で根本から覆される事態となって長い年月が経過しているが、定着したアメリカ通史の書き換えはかなり険しい。しかし近年では西部をアメリカの中心に位置づける先住民史が専門のハマライネンらの研究がアメリカ史の再構築を要求しており、五大湖周辺の17-18世紀の先住民史が専門のウィトゲンは、初期アメリカ史は西部から出発するべきであると明確に主張している。モントヤは「植民地史はジェームズタウンからではなく、サンタフェを出発点とすべき」とし、「アメリカ人、という用語はその空間あるいはその周辺に居住、移住するすべての人々のことである」と述べている。⁽⁴⁰⁾

西部史があらゆる国家、人種、集団、個人が最終到着地として集まってきた場所の歴史として描き出すことを目指すならば、北アメリカにおけるヨーロッパ諸国の植民地計画を理解する必要がある。植民地の観点から見ると、北アメリカの発展は16世紀から19世紀にかけてヨーロッパ諸国がアメリカ大陸をはじめ、世界中に進出した拡大戦略の一環として認識できる。イギリスの植民計画と並行して、北アメリカ全体で見るとポルトガル、スウェーデン、ロシア、オランダ、フランス、スペインなどの植民地が乱立していた。こうした国々が重商主義の時代に活発に貿易を行っていた結果、北アメリカはヨーロッパだけでなく、アフリカやアジアとも結びつけられることになった。植民地史の正確な把握には、ボーダーランド研究が多用する比較研究が有効であり、北アメリカに進出していたヨーロッパ諸国の他地域の植民地とアメリカ植民地の比較研究は進んでいる。先住民人口の崩壊はどの植民地でも見られたが、スペインやポルトガルの場合は新大陸において新しいヨーロッパの建設ではなく、ヨーロッパ人、黒人、先住民の間で何世代にもわたって徐々に混血化が進み、混血種が支配層を浸食していった。先住民の抵抗のパターンも、自発的に移住して衝突を避ける先住民もいれば、侵略者に迎合して一部自治を認めてもらい植民地社会の中で居場所を確保してくれるよう交渉を行う部族もいた。中には激しく抵抗し部族間の連合を作り、偉大なリーダーによって率いられ先住民社会と文化の再興を目指した運動も見られた。北アメリカに進出したスペインは当初、メキシコでの植民計画に倣って鉱山資源を先住民の搾取労働で採取し、勢力を拡大する野心を持っていたが、北アメリカの先住民の服従は容易ではなかった。フランスも同様に大きな領土を獲得するが、当初からあまり多くの人口を送り込まず、目的であった毛皮の獲得は少数の商人と先住民間で取引した。一方イギリスは順調に移住者数を増加させ、男女比も同じくらいにして人口

(39) アトランティック・ヒストリーについては以下参照。Jack P. Greene and Philip D. Morgan eds., *Atlantic History: A Critical Appraisal* (New York: Oxford University Press, 2009)。

(40) Michael Witgen, "The Native New World and Western North America," *Western Historical Quarterly*, 43 (Autumn, 2012), 292-299. Maria E. Montoya の引用は Adrian Burgos, Jr. et al., "Latino History: An Interchange on Present Realities and Future Prospects," *Journal of American History*, 97 (September, 2010), 449-450. 現在、大陸からのアプローチで書かれた最も有効なアメリカ通史は Alan Taylor, *American Colonies: The Settling of North America* (New York: Penguin, 2002)。

増加を図った。こうした列強のアメリカ大陸における政策の違いは植民地期のアメリカの性格を多様なものにした。

先に見たように、ボーダーランド、ミドル・グラウンドなどの研究によって先住民がヨーロッパ人と接触してもその大半はすぐに征服・統治されることなく、部族社会とヨーロッパ人との適切な均衡関係を交渉によって築いていったことが明らかになった。先住民が築き上げた世界を中心に北アメリカ史を分析するには大陸内部からの視点が必要であり、西部史にこれまで適用されてきた時間軸や時代区分は変化せざるを得ない。そうした観点から分析した植民地期の先住民の研究は急速に進展している。近年特に画期的であったのはペッカ・ハマライネンによるコマンチェ帝国の分析であろう。帝国の建設はヨーロッパに限定されたことではなく、ハマライネンによるとアメリカ南部の平原では先住民のコマンチェ族がヨーロッパ人に抵抗しただけでなく、コマンチェ族の作り上げた帝国によって圧倒されたという。18世紀にはコマンチェ族はシャイエン族やラコタ族とともに、馬を扱うことに優れた部族としてアメリカバイソンを狩猟し、領土を拡大し、馬や銃を持たない部族から多くの捕虜を取ってアメリカの平原地帯の広い範囲を支配することになる。このコマンチェ帝国は19世紀まで継続し、長くヨーロッパ列強と対等に競い合いながら、西部の発展に多大な影響を及ぼした⁽⁴¹⁾。

先住民とヨーロッパとの関係解明の一つの糸口は先住民との毛皮貿易の展開である。北アメリカ大陸の毛皮貿易は狩猟を中心とした先住民がほぼ季節ごとに移動していく中での生活様式に組み込まれた活動であり、毛皮取引を巡って先住民同士でも対立が生じたり交渉したりすることがあった。移動を基本とする生活では周辺部族との各種交換は必然的に生じ、結果的に貿易活動、政治的交渉、対立による略奪や戦争などが複雑に絡み合った部族間社会を形成した。こうした慣習の中に入ってきたヨーロッパ人に対しても、先住民は他の部族との接触同様に、新しい集団との接触として対応し、最良の関係の構築のために交渉して交流を深めるというパターンをたどった。代表的な例として、五大湖周辺を支配したアルゴンキアン語族はフランスとの接触を通して勢力を伸ばし、徐々に内陸へと領域を拡大し、その過程で毛皮貿易も西部に広めていった。彼らはもともと、所属するアニシナベ族の領土で五大湖周辺の資源の多くが取れたため、それらの運搬に湖沿いの拠点や周辺の水運を巧みに利用して東海岸やヨーロッパへと出荷するという広範な取引に関わることで権力を確立した⁽⁴²⁾。こうしたヨーロッパ列強と先住民の境界を巡る動きを取り入れて植民地期は分析されるべ

(41) Pekka Hämäläinen, *The Comanche Empire* (New Haven, CT: Yale University Press, 2008). 植民地期と建国期初期の先住民については以下も参照。Ned Blackhawk, *Violence Over the Land: Indians and Empires in the Early American West* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2006); Kathleen DuVal, *The Native Ground: Indians and Colonists in the Heart of the Continent* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2006); Pekka Hämäläinen and Samuel Truett, "On Borderlands," *Journal of American History* 98 (September, 2011), 338–361.

きであり、先のグローバルな西部史という研究展開が昨今の主流となりつつあることを踏まえると、西部に限らず全大陸、西半球全体、海洋を超えての広範な視点を持ってこの時代を捉える必要があらう。アメリカ「西部」とのちに呼ばれた地域はアメリカの州になって統治される前はメキシコから見れば北部であり、カナダから見ると南部であった。フロンティア到達前のヨーロッパ列強が西部領土を競い合った時代の歴史は今後最も研究が進む領域になると考えられ、そうした分析と成果を取り入れたアメリカ前史が通史に組み込まれていくことが求められるであらう。

(4) ジェンダーと環境

ターナーがフロンティアにおける女性の役割を軽視したことは長年批判的的となってきた。ターナー後も長らくはその傾向が続き、ピリングトンの大著も女性はほぼ登場機会がない。マイノリティへの関心が歴史家の間で高まった1960年代になっても、西部開拓はマスキュリティが圧倒した世界で、西部の女性やその役割についての研究は大きく進展しなかった。1970年代後半から「新しい西部史」家のグレンダ・ライリーらによって批判的論文が発表された⁽⁴³⁾。その後、ジェンダーの視点を取り入れた西部研究は新たに隆盛したボーダーランド研究と合流していくことになる。最近ではジュリアナ・バーの研究のように、テキサスのボーダーランドにおいて先住民とスペイン系移住者間の活発な外交的やり取りの中心に女性がいたことを丁寧な資料精読によって明らかにした研究もある。ターナーが女性を軽視し、これまで西部の女性史が進展しなかったのは、当時の研究職に女性は少なく、女性に焦点を当てた研究も盛んでない時期であったことや、ターナーが政治史や経済史の関心はあっても社会史的な視角は持っていなかったこと、制度史や科学的な歴史分析は個人のナラティブを見落とし、大勢の人や集団の研究になってしまう傾向があったことが指摘されている⁽⁴⁴⁾。

西部史における女性の研究は、オーバーランド・トレイルを歩く白人女性のそれから、今日では先住民、メキシコ系、アジア系、アフリカ系の女性へと関心は拡大し、女性史・ジェンダー史研究者は人種や階級、労働、セクシュアリティ、政治経済や環境などの諸要素を考慮した研究手法で評価されてきた。新しい西部史では白人女性しか指さないそれまでの「開拓者の中の女性」という表現を否定し、「西部の女性」を研究対象にすべきであると主張した⁽⁴⁵⁾。西部の女性を取り上げるには、人種、階級とジェンダーの交差点を追求し、異なる文化間の関係性を理解すること、多文化主義の

(42) Michael Witgen, *An Infinity of Nations: How the Native New World Shaped Early North America* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2012).

(43) 一例として Glenda Riley, "Images of the Frontierwomen: Iowa as a Case Study," *The Western Historical Quarterly*, Vol. 8, No. 2 (April, 1977), 189–202.

(44) Barr, *Peace Came in the Form of Woman*; Glenda Riley, "Frederick Jackson Turner Overlooked the Ladies," in Etulain, ed., *Does the Frontier Experience Make America Exceptional?*, 59–72.

(45) Peggy Pascoe, "Western Women at the Cultural Crossroads," in Limerick, Milner and Rankin, eds., *Trails*, 40–58.

西部の特質を理解することが必要であった。西部に女性が存在したことや、犠牲者であったことを示すだけでは不十分で、女性がアクターとして様々な場面で中心的役割を担ったことを明らかにするのが現在の課題である。現在のジェンダー研究の担い手は第2の女性史研究者の波に属する女性らであり、第1の女性史研究者らが「分離された生活圏」や「家庭生活の信仰」に着目したのに対し、第2の波は異なる階級や人種の女性、女性同士の関係だけでなく男女の関係、あるいは女性間の権力関係などを分析し、女性史の流れを大きく転換した。この新しい女性史は西部を研究している者が多く、それは西部が人種的に多様で政治的なアクティビズムも盛んであるなど、20世紀の西部が特色ある地域であることを示している。

西部の女性の中でも、先住民女性の役割については研究が急務である。文化人類学の領域とも共同しながら最近では、16世紀の西部の先住民女性が部族内でかなりの権力を握っていた事実が明らかになってきている。⁽⁴⁶⁾例えば毛皮貿易における女性の役割については、部族とヨーロッパの貿易商人との間に立って交渉したのは女性であったことが、現在では広く認識されている。ヨーロッパ商人らはこうした経済的役割を果たす先住民女性と時に結婚し、妻やその子供らは領域の案内や取引仲介の役割を果たした。⁽⁴⁷⁾しかし新しい西部史から登場した女性史研究や、先に見たコマンチェ帝国の歴史分析のハマライネンの著作においてでも先住民女性ほどちらかというと搾取され、虐げられる犠牲者であり性的対象で、自らの声や意思のない存在として押さえ込まれている。リメリック以来、新しい西部史では女性の声は拾われてきたが、限定的であり、依存性の高い意思決定力に欠けた存在として描かれ続けている。ハマライネンの研究はコマンチェのマスキュリニティと社会的特権の獲得が結びついていたこと、それが帝国の隆盛の背景にあったことが主張の一つであるが、その背景で、女性の地位がどのように変化していったのか、今後より解明が求められるであろう。ジェンダー史の進展と並行して先住民社会における男性性とマスキュリニティの変容についても徐々に解明されてきており、ブルックスは南西部における捕虜の取引において、先住民とスペイン系住民のマスキュリニティの競争が主要因であったことを示している。19世紀以前の女性については資料的な制約があることは否めないが、20世紀以降の西部の各種運動（参政権運動、環境運動や先住民の公民権運動）における女性の役割、特に有色人種の女性の役割についてはまだまだ研究の余地があ

(46) Gutierrez, *When Jesus Came*, 3–36.

(47) Sylvia Van Kirk, *Many Tender Ties: Women in Fur-Trade Society, 1670–1870* (Norman: Oklahoma University Press, 1983); Jennifer S. Brown, *Strangers in Blood: Fur Trade Company Families in Indian Country* (Vancouver: University of British Columbia Press, 1980); John M. Faragher, “The Custom of the Country: Cross-Cultural Marriage in the Far Western Fur Trade,” in Lillian Schlissel, Vicki L. Ruiz and Janice Monk eds., *Western Women, Their Land, Their Lives*, (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1988); Carolyn Podruchny, *Making the Voyageur World: Travelers and Traders in the North American Fur Trade* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2006).

る。ホームステッドを利用した女性の研究も進んでいるが、この分析もまだ不十分である。⁽⁴⁸⁾

一方、環境史の分野は早くからアメリカ西部史の中に組み込まれ、他の領域に先駆けて西部と世界を結びつけ、世界との比較を展開してきた。ティレルが提唱したトランスナショナルなアメリカ史の研究枠組みの一つの方法は、国境を越えて展開する環境史であるとしている。⁽⁴⁹⁾生態系など生物学的領域、疫病の拡大、気候変動などの要素を、世界の他の地域を含め過去に遡って変化を観察することが環境史分野のアプローチであり、地理学や考古学など他の領域との学際的・共同研究も盛んである。そのため環境史においては西部という枠組みはあまり意味をなさない。アメリカ西部に関して言うならば、確かに水資源やエネルギーの研究など、日本でも西部史と言えば今日では環境的なアプローチが主流である。しかしデビッド・イグラの研究など、太平洋における貿易と疫病、環境についての研究は、18世紀後半から19世紀にかけてのアメリカ西部は「太平洋の東部」であった地域が徐々にアメリカの西部になっていく過程であったという視点から研究しており、先にも見たように、環境史で西部を取り上げている研究者は、西部史研究を行っているという意識を持っていない可能性も高い。⁽⁵⁰⁾また、アメリカ西部は「生物学的植民地」であったという見方も存在する。それは、植民地時代は本国から見て距離的に遠い場所での資源の開発、農業・家畜生産のコントロールによって、未発達地域のネットワークを構築させ、その集散地としての都市を建設し、開発していく、という手段を取った。こうした現象はオーストラリアやカナダでも見られた。イギリスに

(48) アジア系、特に中国人女性は売春婦になるケースが多く見られた。Benson Tong, *Unsubmissive Women: Chinese Prostitutes in Nineteenth Century San Francisco* (Norman: University of Oklahoma Press, 1994). 西部の黒人女性については以下を参照のこと。Glenda Riley, “American Daughters: Black Women in the West,” *Montana the Magazine of Western History*, Vol. 38, No. 2 (1988), 14–27; Lawrence B. de Graaf, “Race, Sex and Region: Black Women in the American West, 1850–1920,” *Pacific Historical Review*, 49 (May 1980), 285–313. 女性のホームステッド法の利用については岡田泰男「アメリカ西部と女性の機会——十九世紀中葉から20世紀初頭」『三田学会雑誌』103巻3号(2010年10月), 413–438頁。James Brooks, *Captives and Cousins: Slavery, Kinship and Community in the Southwest Borderlands* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2002); Matthew Basso, Laura McCall, and Dee Garceau eds., *Across the Great Divide: Cultures of Manhood in the American West* (New York: Routledge, 2001). 女性の生活や文化に関連して、西部を中心に異人種間の結婚を規定した法がアメリカ全土の政治や人種概念に与えた影響を分析したものが以下である。Peggy Pascoe, *What Comes Naturally: Miscegenation Law and the Making of Race in America* (New York: Oxford University Press, 2009).

(49) Tyrrell, “American Exceptionalism,” 1031–1055.

(50) 日本におけるアメリカ西部の環境史研究の例をいくつか挙げる。小塩和人「水の環境史——南カリフォルニアの20世紀」玉川大学出版部, 2003年; 折原卓美「カリフォルニアにおける農業開発と水利権の問題——1850～1887年」『土地制度史学』1991年; 岡田泰男「ターナーとミュア——西部開拓と自然保護」『アメリカ研究』22号(1989年3月) 33–51頁; David Iglar, “Diseased Goods: Global Exchanges in the Eastern Pacific Basin, 1770–1850,” *American Historical Review*, Vol. 109 (June, 2004).

とってのこうした「西部」は世界中に見られ、シカゴやメルボルンなどの食肉加工の集散地都市は生物学的植民地の首都的役割として発展した、という見方もできるのである⁽⁵¹⁾。

西部の環境史で最近特にインパクトの強かった研究はトマス・アンドリュースの *Killing for Coal* である。America's Deadliest Labor War の副題は一見、西部における労働争議の研究のようであるが、コロラド州における石炭採掘の鉱山労働の実態、暴力的な労働運動、鉱床を巡る骨肉の争いの結果の1914年のルドロウ虐殺に至る経緯を描き出している。その分析手法は歴史分析の枠を超え、地理学者が用いる地理的な時間軸での過去の環境の現在への影響（垂直的分析という）を、労働者が時間を過ごした奥深い鉱床内の様子に見出し、ディープ・タイムと言われる概念を考慮した分析を行った。一方、地球上の表面的な物質的な動き（水平的分析という）も、コロラドのロッキー山脈の高山に位置する鉱床に何千もの鉱山労働者が移住してきた背景をイギリス、スカンジナビア、バルカン半島、地中海、近隣のニューメキシコやカリフォルニアなどの諸州も含めて、分析している。どのようにこの地に鉱山労働者が集まってきたのか、またその石炭がどのように生産され流通し、市場に出て消費されていったかを環境、経済、人口学的変化などあらゆる要素を考慮して説明している。当時の西部は都市も成長し、ロッキー山脈では金銀の鉱脈、デンバーでは鉄工所や溶鉄鋼施設、鉄道網も緊密化していったが、この乾燥した生物学的に不毛な土地ではこうした変化は石炭への依存なしにはなしえなかった。鉱山開発とエネルギー産業の特異性と地理的環境、労働者の出自と労働の在り方、労使関係や産業資本家の支配への反発などがアメリカ西部地域で融合し、独自の反応を見せた。これまで労働史は伝統的なヨーロッパ史・アメリカ史の枠組みで扱い、環境や自然に関しては地理学的領域に、と棲み分けが存在したが、労働史と環境史の垣根を払うこうした研究は西部史研究の将来の発展の可能性を示している⁽⁵²⁾。

今日の西部史研究の重要な柱である環境問題であるが、環境の視点を取り入れると、人工的に作られた境界は意味がなく、生態系の境界とは全く一致しない。地域や連邦の政策による境界は自然界の流れについては考慮していない。そもそも環境問題は地域や国境を越えて捉えるべき問題であるが、環境史も同様であり、昨今のグローバル化潮流に沿って西部の環境も世界の一地域、一事例としての研究対象となっていくであろう。

むすび——次世代の西部史へ

新しい西部史が西部研究にもたらした成果は大きく、議論も白熱したが、今日から振り返るとその反省点は少なくない。一つには、新しい研究アプローチが登場したことで、極端な二項対立を生ん

(51) James Belich, *Replenishing the Earth: The Settler Revolution and the Rise of the Anglo-World, 1783-1939* (New York: Oxford University Press, 2009).

(52) Andrews, *Killing for Coal*.

でしまった点であろう。西部研究を行う上で、フロンティアを選ぶのか、異文化の接触を重視した地域研究を選ぶのか、いずれかで研究者の立場を明白にする事態になった。それぞれの優れた点を補完し合いながら研究を進めるのが最善の方策であったが、1990年代ごろは両者の対立を深める傾向が続いた。近年になって硬直していた対立は徐々に軟化し、互いに協力し合うための有効な方法の模索が始まった。地域や連邦の枠を超えた西部の枠組みの拡大化・グローバル化の視点、初期アメリカ史の国際性の検討など、今日の西部研究は新しいアプローチを試す柔軟な領域となっている。

ルイスとクラークが探検した未開の西部や、ターナーが描いたアメリカを形作っていく開拓民の波とアメリカの発展する姿からは離れたところで今日西部研究は進化している。新しい西部史以降、西部史の暗黒面が強調された研究が続いたが、ルイスとクラークがオレゴンへ向かう道中に遭遇した先住民らと友好的な関係を築いたり、18世紀のミドル・グラウンドや20世紀の西部大都市の移民コミュニティにおいて、異人種・異文化間が対立と協調を繰り返す緊張関係を持ちながらアメリカ化していく中で、今日の多様な西部は作り上げられた。それが西部の魅力でありアメリカ国民の意識の中で定着している。神話的でもなければ、血腥い抗争も絶えなかった現実の中にも、友好的で、相互に影響を及ぼし合うエピソードが多数ちりばめられる西部はアメリカ国民の憧憬の対象であり続け、国民の想像を膨らませ続ける。その意味においては、今でもアメリカ西部はアメリカ的であり、アメリカ国民の一部であり続けることから、今後のアメリカ史研究の中でも重要な位置づけを維持していくであろう。

要旨: アメリカ史における西部研究は、20世紀中は、ほぼターナーのフロンティア理論をもとに発展した。それは、西部のフロンティアの存在がアメリカ化、個人主義、民主主義といったアメリカ例外主義的要素を生み出し、アメリカの発展を支えたという主張である。1980年代以降この理論は批判を浴び、その後の多文化主義やグローバル・ヒストリーなどの影響を受けて西部研究は細分化し、フロンティア理論のような理論的支柱のないまま、現在に至っている。

キーワード: アメリカ西部、フロンティア、ボーダーランド、ターナー